

# コンビニ罰ゲーム

／＼★タイトルコール

真奈佳

「ぱちぱちぼいす」

真奈佳

「コンビニ罰ゲーム」

／＼★イントロダクション

真奈佳

「コンビニバイト先輩のあなたが、まだ新人なJ  
Dの真奈佳とはじめて罰ゲーム。」

真奈佳

「最初はお互い仕事のミスを減らすために始めた  
ものだったが……。」

真奈佳

「客足が少なくなる深夜。」

真奈佳

「お互い相手に要求する罰ゲームが徐々にえっちな方向へと進んでいき、エスカレートしたあなたの要求に真奈佳は「罰ゲームだから仕方ない」と受け入れていくのだった……。」

●コンビニ店内（夕方）

／＼トラックー「コンビニ罰ゲーム」

真奈佳

「ありがとうございますー」

真奈佳

「ふうっ、やっとお客さん落ち着きましたね」

真奈佳

「この時間、本当に大変ですよね。部活帰りの学生さんとかたくさん来ますから……もうクタクタです」

---

真奈佳

---

「えっ？ 先輩はまだまだ平気？ ううつ、仕方ないじゃないですか。私は、まだやっと3ヶ月の研修を終えたところなんですから」

真奈佳

「先輩みたいに1年近くやってたら慣れるのかも  
しれませんが……」

真奈佳

「でも……先輩も結構ミスしますよね？ あっ、  
思い出した！ さっきも商品の陳列間違えてま  
したし」

真奈佳

「そうですよ。私が気付かなかったら、ずっと間  
違えたままになってましたよ」

真奈佳

「そうそう、感謝してくださいね。店長に小言を  
言われずに済んだんですから」

真奈佳

「……で、ルールはわかってますよね？ ……  
…そうです。ミスをしたら罰ゲーム。今回は何  
にしましょうか？」

真奈佳

「あっ、そうだ。デコピンにします？ すごく威  
力が上がる方法を友達に教えてもらったんです  
よ」

真奈佳

「この前は全然痛くなかったみたいですから、今  
日はそのリベンジです」

真奈佳

「いいですか？ いきますよ」

---

---

真奈佳 「……………どうですか？ ……………あれ？ 痛くないですか？」

真奈佳 「あれえ？ ちゃんと教えてもらった通りにしたのに……………も、もう一回だけいいですか？」

真奈佳 「それでも全然痛くない……………と。うゝん、なんだろう」

真奈佳 「あつ、いらっしやいませゝ」

真奈佳 「（小声で）お客さん、増えてきましたね。一気にレジに來たりしないといいんですけど……………」

真奈佳 「（小声で）って、うわっ……………先輩ごめんなさい。フラグ立てちゃいました。」

真奈佳 「お待ちのお客様こちらのレジにどうぞゝ！」

真奈佳 「お品物3点でお会計1256円になり……………あ、はい？ ポストですか？」

真奈佳 「それでしたら、お店を出て右に曲がったすぐのところにございます。……………はい……………ありがとうございますゝ」

---

---

真奈佳

---

「……ふう。……え？　なんですか？　……お釣り？　渡したかどうか？　えっと、お金を受け取って……ポストの位置を聞かれて………あっ！　渡してない！！」

真奈佳

「えっ！？　せ、先輩が行ってくれるんですか？　すみません！　これお釣りです！！」

真奈佳

「あっちゃ、釣銭の受け渡しミスはやらかした〜！」

真奈佳

「レジの金額で差異を出すと店長めっちゃめっちゃ怒るんだよなあ……」

真奈佳

「あ、どうでしたか？　……間に合った？　あ、良かったあ」

真奈佳

「先輩。ホントすいません！　ありがとうございました」

真奈佳

「はい、会計の時にポストの位置を聞かれて、……それで……お釣りを渡し忘れちゃいました」

真奈佳

「………なんですか、そのニヤけ顔は………わかってます。罰ゲームですよ。大人しく受けます」

真奈佳

「デコピンですか？　……いいですよ。いいですけど……あ、あんまり力一杯しないでくださいね？　……約束ですよ？　絶対ですからね？」

---

---

真奈佳

---

「では……どうぞ……」

真奈佳

「づあッッ！……？ いッッッ………たあああ  
あああああああああッッ！……！」

真奈佳

「痛いっ！ ものすごく痛いです！ なんてそん  
なに痛くするんですか……！」

真奈佳

「それでも手加減したって？……し、信じられま  
せん！ ううううっ、痛い……！」

真奈佳

「せ、先輩がミスした時に、絶対このお返しはし  
ますからね！」

真奈佳

「うう……それにしても痛いよ………って、  
あっ、もうこんな時間だ！」

真奈佳

「先輩、もうそろそろサラリーマンの帰宅ラッシ  
ュの時間ですし、お酒コーナーの補充をお願い  
します！」

真奈佳

「はい、レジの方は私が“ ミスをしないように”  
しっかりと見てますので、がつつり補充し  
ちゃってください！」

●コンビニ店内（夜・サラリーマン帰宅ラッシュ後）

真奈佳

「ありがとうございます！」

真奈佳

「ふう……いきなりすごい数のお客さんが来まし  
たね。さすがに疲れました」

---

---

真奈佳 「でも、これからはほとんどお客さん来ない時間帯ですし、ちよつとのんびりできそうですね」

真奈佳 「ところで……先輩？ さっきお客さんに渡したタバコの銘柄……間違えてましたよ」

真奈佳 「……そうですよ！ 先輩が補充してるときにお客さんからクレームがありましたし」

真奈佳 「レシートを確認させてもらいましたが、レジ担当も先輩の名前だったんですから！……………これは罰ゲームですよね？」

真奈佳 「じゃあ……何をしてもらいましょうか。私のデコピンだとあまり効果がないですし……………」

真奈佳 「そうだ！ 今、ちょうどお客さんも居ないですし、今日の売上目標まであと少しなんで、久々に何か買ってお店に貢献してください」

真奈佳 「はい、大丈夫です。そんなに高いものにしませんから。えっと……………何にしようかな」

真奈佳 「夜ご飯になるようなものとかはこの前しましたよね。同じだとつまらないし……………お菓子類……………も、同じだし……………」

真奈佳 「あつ、本なんてどうですか？ 女性向けのファッション誌……………は、さすがに先輩には必要ありませんよね」

---

---

真奈佳

---

「先輩も読める本は………あ、あれなんかぴったりじゃないですか。……ほら、あそこ………」

真奈佳

「そうです。成人男性向けの本です。先輩にピッタリでしょう？」

真奈佳

「はい、買ってきてください。好きなもの選んできていいですから」

真奈佳

「ダメです。ちゃんと自分で選んでください。私はレジのところで待ってますから」

真奈佳

「ほらほら、早くしないと他のお客さんが来ちゃいますよ」

真奈佳

「いらっしやいませ、エッチな本一冊で宜しいですか？ ８８０円になります」

真奈佳

「ほうほう、先輩はそういうのが好きなんですね？」

真奈佳

「あははっ！ 顔っ、顔真っ赤ですよ！ えっ！？ もしかして、こういう本を買ったの初めてですか！？」

真奈佳

「あはははっ、おもしろい！ 先輩って意外とこういうのに耐性ないんですね」

---



---

真奈佳 「はーっ、お腹痛い……………しばらくこういう  
罰ゲームもいいかもしれないですね」

●コンビニ店内（深夜）

真奈佳 「ありがとうございました」

真奈佳 「……………お客さん誰もいなくなっちゃいましたね。  
しばらくはのんびりできそう」

真奈佳 「はい？ 今がチャンス？ 何がですか？」

真奈佳 「掃除した時の箒はどうしたか？ 私が掃除した  
時に使った箒ですか？ ……えと、さっきお店  
の外を掃除しましたけど……………掃除した後は  
……………確か……………」

真奈佳 「あれ？ そういえば……………どうしたっけ？ ……  
えっ？ 入口のところに置きっ放しだったから  
片づけた！？」

真奈佳 「ううっ、す、すいません。ちょっとボーツとし  
てたのかも……………」

真奈佳 「あ……………チャンスってもしかして……………罰ゲームの  
……………？ あれはそういう意味だったんです  
か！」

---

真奈佳

「ち、ちょっと待ってください！ 罰ゲームは受けますけどエッチな本はっ……エッチな本を買うとかそういうのだけは勘弁してください！」

真奈佳

「あんなの買っても使い道ないし、うち親と一緒に住んでるんで、見つかったら大変な事になるんです！」

真奈佳

「そこを……そこをなんとか！ 他のことなら恥ずかしいことでもいいですから！」

真奈佳

「……………えっ？ 本当に何でもいいのかって？  
えと……わ、私にできることなら、ですけど……………」

真奈佳

「はい？ エ、エッチなこと、ですか？ それは……ば、罰ゲームの範囲なら、し、仕方ないと思います」

真奈佳

「胸……？ 胸を……………？ あの、聞こえないんですけど……………」

真奈佳

「なんで先輩が顔を赤くしてるんですか！ もうつ、いいからはつきり言ってくださいよ！ 私の胸がどうしたんですか！？」

真奈佳

「胸を……………タッチ？ えと……要するに、さ、触りたいってことですか？」

---

---

真奈佳 「あ、ああ……そういう方向、なんですね……  
…まあ、ば、罰ゲームらしい、ですよね！」

真奈佳 「えと………そ、そのくらい、なら……  
…ち、ちよつとなら……いいですよ」

真奈佳 「本当にちよつとですからね！ 思いっきり驚掴  
みとかはダメですからね！ ……優しくす  
るなら……ど、どうぞ」

真奈佳 「………あの、本当にいいですから……早くし  
てください」

真奈佳 「………ん？ 今？ んんっ？ ……  
今、手は伸ばしてきましたけど……触ってませ  
んよね？」

真奈佳 「えっ？ 触ったんですか？ 全然触られた感じ  
がなかったんですけど……先輩、その………  
触った感触はあったんですか？」

真奈佳 「なかった？ それじゃあ罰ゲームにならない  
じゃないですか」

真奈佳 「えと……もう少し、ちゃんと触っていいです  
よ。今のは服に触れたか触れてないかって感じ  
ですから」

---

---

真奈佳

「せ、先輩が物怖じしてどうするんですか！？  
罰ゲームだからですよ？ 触ってほしいとか考  
えてるわけじゃないですからね！」

真奈佳

「わ、わかればいいんです……………それじゃあ…  
…その、どうぞ……………」

真奈佳

「んふああっ！！？」

真奈佳

「な、何やって……………んあつ、つ、強すぎ！ 強  
ぎますってば！！ しかもそこっ、指、ん  
あつ、乳首っ……………！」

真奈佳

「はあっ、はあっ、はあっ……………はあっ……………  
び、びっくりした」

真奈佳

「もうっ、お客さんがいなかったから良かったで  
すけど、どう考えても強すぎますよ！」

真奈佳

「あ、いえ、そ、そこまで深く頭を下げなくても  
……………わ、わざとじゃないのはわかってますから  
……………」

真奈佳

「……………先輩、もしかして、こういうのって初めて  
なんですか？ ………………あ、やっぱり」

真奈佳

「じゃあ……………本当に加減がわからなかったんです  
ね。……………それであんなに強く……………」

真奈佳

「ああ、もう謝らなくていいですから！」

---

---

真奈佳 「それに、もとはと言えば私が先輩にエッチな本を買わせたのが原因かもしれませんし……」

真奈佳 「もう二度としない？ こういう罰ゲーム……もうしないってことですか？」

真奈佳 「で、でも、ほら、お互いにミスをしないように罰ゲームをやっていたわけですし、……私も気にしてないですから、そんなに落ち込まないで大丈夫ですよ？」

真奈佳 「い、いや……別に触られたいとかそういうふうには言ってるんじゃないですよ！？ ただ、毎回同じ罰ゲームだと慣れてきちゃいますから、それだと罰ゲームにならないですし………こ、こんなふうには、お互いに恥ずかしい思いをするなら……罰ゲームとして成立してると思うんです」

真奈佳 「それに……い、今のだって、ちゃんと触ったって言えるのかどうか………だから………も、もう一度……ちゃんとやり直しましょう」

真奈佳 「そ、そうです。やり直します。やり直して」とは………そ、そういうことです」

真奈佳 「は、はい……今度は……今度こそ……や、優しく……触ってくださいね」

---

「も、もう……いいって言っているじゃないですか。早くしないと誰かお客さんが来ちゃいますよ」

真奈佳 「あとで怒ったりしませんから……罰ゲーム……ど、どうぞ」

真奈佳 「ん、ふうっ……そ、そう……そのくらい、力加減が……い、いいです」

真奈佳 「あ、親指……んん、あっ……い、いえ……なんでも……ふ、あ……」

真奈佳 「ああ、あっ……あはは……恥ずかしい……なんだか……ほ、本当に……罰ゲームって、感じですよ……しかも、お、お店の中で……」

真奈佳 「だ、大丈夫です……ふう、う、誰も……き、来てません、から……あ、ああ……」

真奈佳 「えっ？ い、いつまで、ん、あ、やって、いいのかって？ そ、それは……ふあ、う……お、お客さんが、く、来るまで、んんっ……い、いいんじゃないですか？」

真奈佳 「はあ……はあ……体……熱い……ああ……」

---

真奈佳

「ふあっ!？ あ、ち、ちょっと待って……ん、んっ……いい、いえ、痛かったわけじゃなくて………その………」

真奈佳

「先輩の、ゆ、指……親指が、あ、当たってる、ところ………ち、乳首、なんで………こ、擦れると、ちよっと……きも、ち……いい」

真奈佳

「し、仕方ないじゃないですか……そこは、あ……び、敏感、なんで……んあっ、あ、あの、だから……乳首は………!」

真奈佳

「だ、だめって、わけじゃ、あ、ないけど……んうっ、声が、も、漏れ、ちやう」

真奈佳

「他のお客さんが、い、いないって……んあっ、そ、そうですけど………」

真奈佳

「でも、誰か来て……こんなところ………み、見られたら………」

真奈佳

「え、……バックヤードのほうに移動するかって？ 確かに、そっちに移動すれば、お客さんから見られる心配はなくなりますけど………」

真奈佳

「ん、んっ、もう、さっきから、んくっ、乳首、ばっかり………」

真奈佳

「先輩……もしかして、わかっててやってます?」

---

---

真奈佳

---

「……なんとなく、ポチツとしたのがある程度つて……まあ、ブラしてますから、触ってるほうは案外わからないのかもしれませんが」

真奈佳

「えっ？ 次の罰ゲーム？ ま、待ってください。なんで罰ゲームが複数なんですか！？」

真奈佳

「何度も失敗したから？ そ、それは……確かにさっきは立て続けにミスがありましたけど……」

真奈佳

「まあ、先輩のフォローもあって防げたものもありますし……」

真奈佳

「わかりました。次の罰ゲームはなんですか？」

真奈佳

「……ブ、ブラジャーを外す！？ 今、ここですか！？」

真奈佳

「そ、そんなこと……お客さんが来たらどうするんですか！？」

真奈佳

「……いや、確かにここの制服は生地が厚いんで透けたりしませんけど……でも……」

真奈佳

「どうしても……やらないとダメですか？ ……今日の先輩、いつもよりエッチですね」

真奈佳

「はあー、……わかりました。ブラを……外せばいいんですね？」

---



---

真奈佳 「……………外しました。これで……………いいですか？」

真奈佳 「次の罰ゲーム？　そうですね……………なんとなくそう来るとは思っていましたけど……………」

真奈佳 「当ててみましょうか？　ブラジャーのなくなつた私の胸を……………さ、触るつもりなんですよ？」

真奈佳 「か、覚悟はできてますから、先輩の好きなように……………」

真奈佳 「ひっ！？　……………お、お客さんが……………い、いらっしやいませ」

真奈佳 「に、220円ちょうどいただきます。……………ありがとうございます」

真奈佳 「……………はあっ、び、びっくりした。あの人、き、気付いてませんよね？　私が、ブラジャーしてなかったって」

真奈佳 「たぶん大丈夫って……………ほ、本当に透けたりしてませんか？　か、形がわかりやすくなってるのか？」

真奈佳 「やっぱり……………バックヤードに移動したほうがいいかもしれないですね」

---

---

真奈佳

「こ、ここだと落ち着かないですし……じゃあ……  
……行きましょう、か」

//トラック♫ 「罰ゲームに従います」

●バックヤード 深夜

真奈佳

「ここなら……どんな罰ゲームでも……できます、ね」

真奈佳

「それで……他に誰もいないところに連れて来て……ど、どんな罰ゲームをするんですか？ やっぱり……ほ、本当に……また、胸を触るんですか？」

真奈佳

「い、いえっ、大丈夫です！ 先輩になら………  
……ど、どんな罰ゲームでも………大丈夫です」

真奈佳

「えっ？ 制服のボタンを外したい？ ぬ、脱がせたいって……それだと……せ、先輩に見られちゃうんですけど………」

真奈佳

「たくさんミスをしたから、そのくらいの罰ゲームがちょうどいい？」

真奈佳

「もう……先輩がこんなにエッチな人だなんて知りませんでした」

真奈佳

「でも………私がたくさんミスしたのは事実ですから……罰ゲームに、従います」

---

---

真奈佳 「ぬ、脱ぎました……………これで……………いいですか？」

真奈佳 「えっ？ 今、どんな気持ちかって？ ど、どうと言われても……………恥ずかしいです」

真奈佳 「とても恥ずかしいですけど……………ば、罰ゲーム……………ですから……………」

真奈佳 「あとは……………先輩の好きなように……………してください」

真奈佳 「んあっ……………！？ はあっ……………先輩の、手の、熱が……………あ、あっ、はつきり、と、ふあっ……………わかる」

真奈佳 「服の上から、とは……………んっ、全然、ちが、う……………ああっ……………！」

真奈佳 「先輩は、あ、ど、どうですか？ んあ、はっ……………気持ち、よ、良かったり、するんですか？」

真奈佳 「……………そう、なんですネ。ん、ああっ……………心臓、は、破裂、しそ……………」

真奈佳 「はあっ……………はああっ……………あの、ん、んんっ、お客様が、あ、来る、まで……………ですよ？」

真奈佳 「罰ゲーム、は……………ああ、んっ……………そこまで、ですから、ね？」

---

---

真奈佳

「ひあっ!？　そこ、あ……………あ、あっ、ち、乳首っ…………乳首に、あ、当たって、ます……………」

真奈佳

「んんっ、ちよっ、あっ……………なんで、んっ、逃げたら、お、追いかけてくるんですか!？」

真奈佳

「そこは、あ、んんんっ、う……………か、感じ、過ぎ……………ふ、う、ああっ……………わ、わざとですか!？」

真奈佳

「ば、罰ゲーム、だからって……………んああっ、それは、あ、そう、ですけど……………あ、あっ……………」

真奈佳

「あんまり、そ、そこ、ばっかり……………んんんっ、されたら、あ、ふあっ……………声が、あ、で、出ちゃ、あああっ……………」

真奈佳

「んはっ、あ、ああっ、本当に、ま、待って……………力が、抜け……………んんんっ、刺激が、あ、強すぎ、う……………」

真奈佳

「はあっ……………はあっ……………えっ？　どんなって……………んん、うっ、言われても……………はああっ……………あああっ……………」

真奈佳

「こんなに、も、揉まれて、ん、あっ、乳首、こ、擦られ、たら……………ああっ、気持ち、いい……………ふああんっ……………」

---

---

真奈佳

「はい、あ、ああっ、これ、気持ちいい、です……んあっ、体が、熱く、なって……ふ、あ、ああっ……頭が、と、飛んじやい、そう……!」

真奈佳

「あ、あっ、これ以上、さ、されたら、あ、んあっ……もう、た、立って、いられな……んんんっ!？」

真奈佳

「だから、あ、乳首っ……乳首を、お、んんうっ、く……っ、摘まんだら、ふあっ、あっ、ああっ、きゅって、し、しちや……ひああっ、それ、ず、ずっと、したらああ……!」

真奈佳

「え……? もっと、罰ゲーム……?」

真奈佳

「んんんうっ!？ あ、あのっ、先輩っ!？ なんで……乳首、い、す、吸って……んふああああっ!」

真奈佳

「あ、あっ、そんな、舐められ……んあっ、それ、ビリビリ、するっ……! んくあああっ、だ、だめえっ……!」

真奈佳

「先輩、ほ、本当に、んあ、う、くあっ、乳首、あ、痺れ……ふ、はあああっ……! ああああっ、ちゅーちゅー、しちや、あああっ……!」

---

---

真奈佳

「こういう事、ん、あつ、先輩……んんうつ、し、したかったん、ですか？ あ、ふああつ……！」

真奈佳

「そんなに、ち、乳首、吸ったら……あ、赤ちゃん、みたい……」

真奈佳

「ん、ふふつ……ちよつとだけ、あ、カワイイ、かも……あ、ああつ……ふああんつ……！」

真奈佳

「これも、罰ゲーム、んんうつ、なん、ですね？ それ、なら……はああつ、もう……んんつ、先輩の、す、好きなように、して、ください」

真奈佳

「はあつ……はああつ……きも、ち……いい……体が……ん、ああつ……溶け、そう……」

真奈佳

「は、ああつ……先輩……ああつ、先輩……も、もっと、お……」

真奈佳

「あ……い、今は……あ、んんんつ、そ、その……ん、んつ、はい、き、気持ち良く、なっていたら、あ、んつ……罰ゲームに、な、ならない、ですけど……」

真奈佳

「でも、せ、先輩の、む、胸の、揉み方、とか……んあつ……乳首の、吸い方とか、あ、じ、上手、で……」

---

---

真奈佳 「私……あぁっ、私い……気持ち、いい……すく、う、気持ちいい、ん、です……！」

真奈佳 「えっ？ 私が、エッチな、女の子……？ ち、違います、う、これは……そ、そういうのじゃ、なくて……」

真奈佳 「先輩が、あ、あぁぁっ、上手だから、あぁっ、だから、か、感じちゃう、ん、です……んはあぁっ……！」

真奈佳 「あぁぁっ、乳首が、あ、せ、先輩の、舌で……んあぁっ、ペロペロされて、あ……だめっ、声っ……出ちゃう……！」

真奈佳 「あ、ふぁっ、あ、あぁぁっ、ん、はっ、ふ、はぁっ、あ、はぁぁぁっ、あぁぁぁんっ……！」

真奈佳 「ふ、あ……！？ せ、先輩？ あのっ、は、反対の手が……下に……」

真奈佳 「んうっ、く、ふっ……それも……？ それも罰ゲーム、んん、なんですか？ でも、そっちは……あ、あっ、スカートの、中に……」

真奈佳 「そっち、触っちゃ……ふぁっ……？ ほ、本当に、んんっ、触る、なんて……はぁっ、はぁっ……そこは、あ、い、一番、恥ずかしいところ……」

---

---

真奈佳

「あ、また……あ、あつ、私……んああつ、さ、触られて……あああつ、おっぱい、だけじゃなくて……し、下のほう、も……ああつ、こ、擦っちゃ……！」

真奈佳

「そこは、あ、んんっ……あ、あつ、本当に、そっちも、す、するんですか？」

真奈佳

「い、嫌ってわけじゃ、あ……ない、けど……ふああつ、そっちまで、さ、されたら、あ、んあつ……！」

真奈佳

「はあつ、はあつ、はあつ、あ、ああつ、そんなに強く、されたら……はあつ、く、食い込んだじゃう」

真奈佳

「何がって……んんっ、い、言わなくても、わ、わかりますよね？」

真奈佳

「え、ええっ？ 聞きたい、って、んんんっ……どこに、く、食い込んでるのか、って、んあつ、そ、それ、もしかして……エッチなこと、を、言わせよう、と、してますか？」

真奈佳

「そうだ、って、んん、うっ……せ、先輩、そういうのが、あ、好き、だったんですか？」

---



---

真奈佳

「はあっ、はあっ……あ、あっ、好きかも、つて、んんっ、そんな、はつきり言われたら……はあっ、はああっ……これも、罰ゲーム、つて、こと、ですか？」

真奈佳

「う、んんっ、罰ゲームなら、あ、ふあっ……し、仕方ない、のかな……ああっ……！？」

真奈佳

「せ、先輩っ、指が、あ……グリグリって、んんっ、パ、パンツに、く、食い込んで……ふああっ……あ……！」

真奈佳

「は、はい、言います……んは、あっ、お……おま、んこ、です……んんんうっ、おまんこ、に……先輩の、指が、んんっ、食い込んで、ます」

真奈佳

「あっ、そ、そこ……ん、あっ、そこは、い、一番、感じ……あああっ……！」

真奈佳

「ああっ、は、ああっ……濡れて、る？ んんっ、おまんこが、ですか？ ……だ、だつて、仕方ないじゃないですか」

真奈佳

「こんなに、んん、うっ、気持ちいい事、ふ、ううっ、ずっと……ずっと、されたら……ああっ……！」

真奈佳

「されたら……んんっ、こ、興奮……しますよ」

---

---

真奈佳

「そ、そうです……ふ、あっ……先輩に、い、いっぱい、エッチなことされて……あ、あ、あ、興奮してるんです」

真奈佳

「興奮したから、ぬ、濡れて……あああ、そんなにグリグリされたら、あ……パンツが、よ、汚れちゃう」

真奈佳

「すごく濡れてるって……は、あ、そうしたのは、せ、先輩じゃないですか」

真奈佳

「えっ？ 濡れてるなら脱げばって……そ、んな……恥ずかしいこと……」

真奈佳

「もうたくさん恥ずかしいことはしてるって……それはそうですけど……でも、そこを……おまんこ、を、見られるのは……おっぱい、見られるより……恥ずかしいです」

真奈佳

「恥ずかしいから罰ゲームになる？ 確かにそうですねけど……あ、ああ、せ、先輩っ！？ なんでスカートの中に手を入れるんですか……！？」

真奈佳

「やっ、ダメです！そこはダメって……い、言っているのに……」

真奈佳

「今日の先輩、エッチ過ぎますよ……ほ、本当にパンツを下ろすなんて……」

---

---

「ダメです。このスカートを押さえてる手は離しません。そんな事したら本当に見えちゃいます」

「て、手をどかさうとしないでください。本当に見えちゃうんですよ!」

「ほ、本当に見たいって言われても……確かに罰ゲームにはなりますけど、でも……!」

「あああつ、ひ、引っ張らないでください! 何をニヤニヤしてるんですか! 先輩、もしかして楽しんでますね!？」

「そこは……そこは本当にダメ——きやつ!？」

「あいたつ! ……………い、たたたたつ……………! もう、足が滑っちゃったじゃないですか」

「……………って、きやあつ!？ わ、私、今つ……………思いつきり足を開いて……………」

「先輩、今……………み、見ましたよね!？ ………………なんで今更顔を真っ赤にしてるんですか! 見ようとしてたじゃないですか!」

「こういうハプニングで見えてしまうとドキドキする? 意味がわかりません……………っていうか、やっぱり見たんじゃないですか!」

---

---

真奈佳

「ああもう、恥ずかしい……おっぱいを見せるの  
だってすごく恥ずかしくて緊張してたのに……  
…」

真奈佳

「それなのに……私の大事なところまで先輩に見  
られちゃって……」

真奈佳

「はあ……もういいです……見られちゃったって  
思ったら、これ以上隠しても仕方ない気がして  
きました……」

真奈佳

「先輩……罰ゲーム……最後まで、してくれ  
ますか？」

真奈佳

「いいの？ って、今更そんなこと聞きます？  
……本当の事を言つと……先輩にエッチな  
ことされると、すごく体が熱くなるんです」

真奈佳

「熱くなって……気持ち良くなって………も、  
もっと……してほしいって……思っちゃったん  
です」

真奈佳

「だから、先輩………もっとすごい………エ  
ッチな、罰ゲーム………してください」

//トラックヤ 「もっとすごいエッチな罰ゲームをしてください」

真奈佳

「ああ……先輩……」

真奈佳

「わ、私……こんな格好……パンツも履いてない  
のに、先輩の前でこんなに足を開いて……」

---

---

真奈佳

---

「もう、は、恥ずかしくて死にそうです」

真奈佳

「あ、あつ、そんな……開くなんて……あ、あつ、そんな事したら、お、おまんこの、奥のほうまで……見えちゃう」

真奈佳

「先輩、見ないで……見ないでください」

真奈佳

「そんなふうに言われると見たくなるって……今日の先輩、いつもと違いすぎます」

真奈佳

「んあつ！？そこは……あ、ふあつ、ク、クリトリス………」

真奈佳

「ああんっ、それを、んんっ、クニクニしたら……あ、あふっ……だめえっ……！」

真奈佳

「はあつ、はああつ……お、おつきく、なってる、私……あふあつ、先輩に、エッチなこと、されて……ああんっ、クリトリス、大きくなっちゃってる」

真奈佳

「恥ずかしい、のに、んあつ、でも、体が熱くて……ふ、ああっ、せ、先輩……そこ、あ、もつと………」

真奈佳

「は、はい、ああっ、もっと、して……んんんっ、もっと、気持ち良くしてほしいです」

---

---

真奈佳

---

「エッチな、女の子……？　は、はい、そうです……んんうっ、私、ほ、本当は……あ、あっ、エッチな、女の子なんです」

真奈佳

「き、今日だって、本当は、あ、ああっ、先輩が、おっぱい、触りたいって、い、言ってきたとき……んはあっ、エッチなこと、されるんだあって……ドキドキ、してたんです」

真奈佳

「だから、さ、最初に、ふあんっ、触ったのか、ど、どうかも、わからないのは……さ、寂しい感じがして……ん、んんっ、もっと強く、触ってほしくて、それで……あ、ああああっ……！」

真奈佳

「クリトリス、あ、こ、転がすみたいにな、されると……はああっ、気持ち、いい……んんっ、おまんこ、ぬ、濡れちゃ、う……！」

真奈佳

「あ、ああっ……？　先輩、それっ……あ、あっ、おまんこの、んんうっ、ぬるぬる、したのを……ふあっ、ク、クリトリスに、塗る、なんて……ああっ……！」

真奈佳

「ひゃわああっ……？　か、皮も、あ、んあっ、塗りながら、クリトリスの、か、皮あ、む、剥いちや……あああああっ……！」

---

---

真奈佳

「これ、す、すごい、ああっ、む、剥き出しのクリトリス、く、はああっ、そんなに強く、は、速く、刺激したら、あ、あ、あああッ……！」

真奈佳

「先輩っ、ああっ、なんで、ん、はっ、こんなに、う、うまつ……あああっ、そこ、お、そこそこそこおおおっ、気持ちいいよおおおっ……！」

真奈佳

「自分でするより、んはあっ、気持ち、あ、あああっ、良すぎ、ひ、あああっ、う、はああああっ……！」

真奈佳

「んあ、あっ……えっ？　自分で、ん、あ……いい、今は……あ、ああっ！」

真奈佳

「ち、ちがっ、あ、ふあっ、今は、あ……せ、先輩の聞き間違いです！」

真奈佳

「んは、あっ、じ、自分で、なんて、んはっ、はああっ、い、言っていない……はあああっ、そこグリグリいい、す、するのはあああ………

……！」

真奈佳

「ま、待ってください！　それ、あ、あっ、っ、強いっ、あはああっ、む、剥き出しなのに、ぎゅってしたら、はあ、あああっ………！」

---

---

真奈佳

「ご、ごめんなさい！ 聞き間違いじゃ、あ  
あっ、ないです！ い、言いました！ 自分  
でって……！」

真奈佳

「正直に言いますから、んひゃああっ、もう少し  
弱くしてください！」

真奈佳

「ん、はあっ……！？ はあっ、あああっ……  
…あ、あ、ふああっ、そのくらいが、あ、ち、  
ちようど、いいです」

真奈佳

「はあっ、はああっ、自分でって、いうのは、あ  
……それは……ううっ、ど、どうしても、  
言わないとダメですか？」

真奈佳

「これは罰ゲームだから……んんっ、それを  
言われると……はああっ……わ、わかりまし  
た」

真奈佳

「ひ、一人で、んんっ、すること、お、あ、あり  
ます……あ、ああっ、ムラムラ、する、こと、  
ふあっ、あります、んんっ！」

真奈佳

「オ、オナニーって……はっきり、言わないでく  
ださい……んはあっ、でも、そ、そうです……  
あ、あっ、オナニー、し、したこと、ありま  
す」

真奈佳

「どんなふうにつて、んんあっ、そ、そこまで言  
わないとダメなんですか？」

---



---

真奈佳

「罰ゲームなのは……あ、はっ、わかって、ますけど……あ、んんっ、でも、これを言ったら……せ、先輩に、引かれちゃいそうで……」

真奈佳

「引かないって、ふあ、あっ、ほ、本当ですか？絶対、ですよ？あ、んんっ……約束ですからね！」

真奈佳

「あああっ、だいたい、い、いつもは、夜……あ、んっ、自分の部屋で、はあっ……はあっ……します」

真奈佳

「あ、でも、んくっ、時々は、ト、トイレ、とか……んあああっ……！」

真奈佳

「やり方、は、ああ、今、せ、先輩が、してくれてるみたいな、か、感じ……指で、んあっ、クリトリスを、ふ、あっ、揉むみたいに、するんです」

真奈佳

「手を、足で挟んで……んんっ、横向きですが、あ、好き、です……！」

真奈佳

「な、何回くらいって……ん、もう……私……あふ、あ、先輩に、秘密が無くなっちゃいますよ」

---

---

真奈佳

「ああ、く、はあっ……ふああっ、私、んあっ、じ、自分でも、わかって、る、ん、ですけど……んんんっ、性欲が、お、女の子に、しては、強いみたいで、ふあっ……か、回数、お、多いん、です」

真奈佳

「お、多い、ときは、あ、ふ、ああっ、一日に、い、んひいつ、さ、さん、かいっ、んんっ、3回とか、あ、時々、あります」

真奈佳

「あ、んんっ、いえ、一番多い、のは、あ、ああっ、い、一回だけ、ふ、あああっ、ろ、6回、したこと、あります」

真奈佳

「そ、そんなに驚かないで、く、ださい……はあっ、はああっ、家に、初めて、あふ、あっ、パソコンが来て、あ、んんっ、だんだん使えるように、なっけてきて……」

真奈佳

「それで、あ、んっ、き、興味がわいて、あ、ふあっ、それで……エッチな、単語を、あ、あ、検索してみたら……す、すごいのが、出てきて……」

真奈佳

「その日は、あ、ち、ちようど、あ、あっ、私しかいなくて、それで……お、お母さんが帰ってくるまで……あ、あああっ……!……!」

---

---

真奈佳

---

「ああもうっ、は、話しちゃった、あ、こんな……秘密、あ、ふっ、い、今まで、誰にも、んんっ、話したことなかったのに……!」

真奈佳

「ふ、あっ……!？ オナニーが、す、好きか、どうかって……あ、んんっ、そんなの、い、言えません!」

真奈佳

「言わなくたって……そ、想像はつくでしょう?」

真奈佳

「んんっ、く、ふっ……私の口から聞きたいって……あふ、あっ、んあっ……先輩、もしかして……案外サディストなんですか?」

真奈佳

「あ、あっ、もう……あ、んんうっ……す、好き、です……ふあ、好きじゃなかったら、ろ、6回もしません!」

真奈佳

「好き、です、ああ、んっ、オナニー、好き、あ、あっ、オナニー大好きです、ん、あああっ……!」

真奈佳

「せ、先輩、は、あっ、はあっ……引いて、ませんか? こんな……オナニー大好きで、ふあ、んっ、一日に、6回も、んんっ、オナニーしてる、女の子なんて……」

真奈佳

「え、ええっ!? 興奮したって……そ、そういう反応なんですか!?」

---

---

真奈佳

「いえ……ひ、引かれるよりは……いい、いいですけど……あ、んんんっ、その、動き……ひいんっ、すごく、き、気持ちいい、です!」

真奈佳

「あああっ、クリトリスの、皮っ……剥いたら、あ、こ、こんなに……気持ちいい、なんて……し、知らなかった」

真奈佳

「はい、あ、んんっ、今まで、こ、怖くて、あ、あっ、したこと、なかったんで……」

真奈佳

「は、はいっ、んんんうっ、いいです、う、これっ……ずっと……ずっと、してほしい、です」

真奈佳

「ふあ、あああっ、はい……おまんこ、いいです、んん、んんんっ、おまんこが、すごく、う、……奥のほう、が……きゅんきゅんします」

真奈佳

「ああああっ、いいよおおっ、剥き出しのクリトリスううっ、く、ふっ、ぐにぐにされるのいいよおおっ、気持ちいいよおおおおっ………!」

真奈佳

「私、も、もうっ……イクッ、う、ううっ、イク、イ、イっちゃ、う、ううあっ、こんなの、され、たら、あ、あああっ、イクッ、おまんこ、イ、イっちゃいます!」

---

---

真奈佳

「先輩っ、私、ああっ、もう、が、我慢できませんっ！ イクッ、ああっ、いっちゃう、いっちゃ、う、うううっ……！ イクッ、イクイクッ、ううっ、イクッ！」

真奈佳

「イクイクイクイクッ、うう、イク、う、イクッ、イクイクイク、く、くうううっ、イクイクイクイクイクイクイクイクイクイクイクイクウウウウウ……！！！！！」

真奈佳

「イイイックウウウウウうううあああああああああああ——

——ッッ！！！！！！！」

真奈佳

「あ、はあああっ、ああっ、うひゃあああああっ！！？ ス、ストップ！！ せんぱっ……手っ、と、止めっ……手を止めてくださいっ！！！」

真奈佳

「イきました！ イきましたからっ……し、刺激っ、強すぎます！ もう止めてくださいっ！！！」

真奈佳

「んはっ……ああ……はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……！！！」

---

真奈佳 「すご、かった……………ああ……………本当に……  
……イっちゃい、ました……」

真奈佳 「はあああ……………頭、あ……………飛び、そう……………  
……もう、何も……………考えられない」

真奈佳 「はあっ……………はあっ……………はあっ……………私……………ひどい  
格好になってますよね？ こんな……………バイト先  
のバックヤードで、おっぱいもおまんこも丸出  
しにして……………足はこんなに開いちゃって……………び  
ちよびちよに、濡らしちゃって……………」

真奈佳 「罰ゲーム……………こんなにすごい事する日が来るな  
んて思いませんでした」

真奈佳 「もう……………そんなにじっと見ないでください  
よ。今だって恥ずかしいんですから……………」

真奈佳 「えっ？ どうして足を閉じないのかって？ そ  
んなの決まってるじゃないですか」

真奈佳 「先輩が……………見たそうにしてるからですよ」

真奈佳 「私も、なんだか今は……………先輩に見てほしいっ  
て、思っちゃって……………」

真奈佳 「すごく恥ずかしいけど……………ひどい格好だっと思  
うけど……………私の全部を……………先輩に見てほしいん  
です」

---

---

真奈佳

---

「ふふっ、変ですよ？　こんな……濡れたおまんこを、見られたいなんて……変態ですよ」

真奈佳

「えっ？　わかる？　先輩もわかるんですか？」

真奈佳

「先輩の……見てほしい？　えっ？　何を……ですか？」

真奈佳

「……ええっ！？　せ、先輩のもって……も、もしかして……」

真奈佳

「先輩の……おちん、ちん……つて、意味ですか？」

真奈佳

「私に……見られたい、ん、ですか？　興奮して……そういうふうになっちゃったんですか？」

真奈佳

「い、いえっ、別に……嫌なわけじゃなくて……びっくりしちゃって……」

真奈佳

「でも……わ、私も……見たい……先輩の……おちんちん……見てみたい、です」

真奈佳

「あ、あ……すごい……こ、こんなに大きいなんて……」

真奈佳

「な、生で見たのは初めてです。想像してたよりも……なんて、言うか……すごいです」

---

---

真奈佳

---

「す」過ぎて……ドキドキしてきて……ああ、先輩の……おちんちん……先輩のおちんちん、見ちゃってる」

真奈佳

「えっ？ オカズに……？ あ………は、はい……私、き、きつと……次のオナニーするとき、先輩のおちんちんをオカズにしちゃう」

真奈佳

「先輩も……？ 先輩もオナニーするとき……私のおまんこ、オカズにするんですか？」

真奈佳

「本当は今したいって……ぷっ、この状況で、ですか？ お互いに……おちんちんと、おまんこを見ながら……オナニー、とか？」

真奈佳

「そういうのも……いいかもしれませんけど……でも、この状況なら………」

真奈佳

「もう……そこで不思議そうな顔しないでくださいよ。この状況ですよ？」

真奈佳

「女の子が無防備に足を開いて濡れたおまんこを見せて……それを見てる先輩のおちんちんは勃起してて……」

真奈佳

「オナニーよりも……もっとなしたいこと……あるんじゃないですか？」

真奈佳

「入れたく………ないんですか？」

---



---

真奈佳 「わかってます。自分が何を言ってるのかは……」

真奈佳 「えっ？ 罰ゲームにしてもやり過ぎ？ ……  
…確かにそうかもしれませんがね。これは、罰  
ゲームの範疇を超えてるのかも……」

真奈佳 「でも……心配いりませんよ。だって………エ  
ツチする相手が先輩だったら……罰ゲームには  
なりませんから……」

真奈佳 「……ぷっ、なんですかその顔は……。そんなに  
驚かないでくださいよ」

真奈佳 「自分でも……こんな恥ずかしい格好で……恥ず  
かしい告白してるって自覚はあるんですから」

真奈佳 「だから、何度も言わせないでください。先輩が  
したいなら……私は………ほら………」

真奈佳 「こうやって……自分でおまんこ掘げちゃうこと  
だってできるんですから……」

真奈佳 「見えてますか？ 私のおまんこ……おまんこの  
奥の奥まで……一番恥ずかしいところまで見え  
ちゃってますか？」

真奈佳 「ここに……おちんちん、入れてみたいと思いま  
せんか？」

---

真奈佳

「んはああっ！？　せ、先輩っ……！　あ、あ  
あっ、熱いっ……先輩のが、あ、おちんちんが  
……私の、中に……！」

真奈佳

「ん、んん、うっ……は、入ってるんですよね？  
これ、この感覚……全部、入ったんです  
か？」

真奈佳

「あ………本当だ。先輩のが入ってる」

真奈佳

「痛み？　ああ、ちょっとだけ痛いですけど……  
想像してたほどじゃないです」

真奈佳

「あっ、初めてですよ！　あまり痛みは感じませ  
んでしたけど、先輩以外の人としたことありま  
せんから！」

真奈佳

「そ、そういえば……十分に濡れてたら、処女で  
も痛くないって聞いたことがあります」

真奈佳

「そう、ですね……ものすごく……濡れてますか  
ら……」

真奈佳

「し、仕方ないじゃないですか。先輩にあんなに  
……おっぱい揉まれたり、吸われたり、おまん  
こ触られたりしたんですから……」

真奈佳

「特にあのクリトリス責めが本当に気持ち良くて  
……あんなの覚えたら、オナニーじゃ満足でき  
なくなっちゃいそうで……」

---

---

真奈佳 「それなのにこんな……ああ、おちんちんがビクビクしてるのがわかります」

真奈佳 「どうしよう。もっとドキドキしてきちゃいました」

真奈佳 「こんなの……先輩のおちんちんの感触を知っちゃったら……私、本当にオナニーしても物足りなくなっちゃいそうで……」

真奈佳 「あっ……！ あ、あっ……おちんちん、が……動いて……ふ、ああっ……！」

真奈佳 「はい、ゆっくりだったら、もう動いても大丈夫だと思います」

真奈佳 「んはっ……あっ……あっ、あっ、あっ……あああっ、擦れて、る……あああっ……！」

真奈佳 「これが……セックス……んっ、セックス、なんです」

真奈佳 「ああっ、ああっ、お腹の奥に、ん、あっ、響く、感じが、あ……あ、あ、あ……！」

真奈佳 「すごい、ですね、んあっ……本当に、ひ、ひとつになった感じが、します」

---

---

真奈佳

---

「か、硬い、あ、硬くて、熱い……ふ、あつ、おまんこで、あ、んんんっ、こんなにはつきり、わかるんだ……」

真奈佳

「えっ？ あ、本当だ……血が、出てきましたね……ふふっ、良かった、あ、ああっ……！」

真奈佳

「んん、うっ、どうして、良かったのかって？んふ、うっ、それは……ん、んっ、これで、あ、あっ、私が処女だったって、んんんっ……証明になるじゃないですか」

真奈佳

「そう、ですよ、んうっ、ふっ……私の処女……んっく、先輩に、捧げたんですよ」

真奈佳

「はああっ、あ、責任、とってくださいね？ ……あ、んんっ、なんて言ったら、ふふっ、重すぎでしょうか？」

真奈佳

「ひゃっ！？ そ、そんな大きな声で……しかも、とるって……」

真奈佳

「あんっ、ああんっ、な、何度も、言わなくていいですから……んんっ、責任、とってくれるんですね？」

真奈佳

「ふふっ、どんな責任の取り方、なのかは……あ、あっ、あとで、聞かせてください……あああんっ！」

---

---

真奈佳

「い、今……あ、そこです……ふあっ……ふああっ……おちんちんが、当たってるところが……き、気持ちいい」

真奈佳

「はい、そこです……ああ、クリトリス、で、するのとは、あんっ、違った感じで……ああ、気持ちいいのが、あ、体の中に、な、流れ込んでくる」

真奈佳

「あ、あ、そこを、ああんっ、ずっと、されたら、ふあっ……んんうっ……!」

真奈佳

「く、ふうっ……ああ、こうすると……お、おまんこに、力を入れると……んんっ、おちんちんの、感触が、もっと強く……わかります」

真奈佳

「先輩は……? こうやって、締め付けてるほうが、いいですか?」

真奈佳

「んんうっ、そうなんですな……んっく、締め付けてる、ほうが……先輩も、気持ちいいんですね」

真奈佳

「だったら……んっく……んう、ふっ……んんっ……んんんっ、ずっと……し、締め付け、ちやいます」

真奈佳

「んうっ……んんうっ……く、ふっ、ううっ……どうですか? 先輩……気持ち、いいですか?」

---

---

真奈佳

---

「んふうっ！？　せ、先輩……んううっ、動きが、あ、あっ、すごく、ち、力強く……く、ふあっ……！？」

真奈佳

「はい、あ、んんっ、このくらいの、速さなら、あ、んああっ、だ、大丈夫です」

真奈佳

「すごく……ああっ、速いほうが、ふあ、あっ、気持ち、いいいいっ……！！！」

真奈佳

「はい、もっと……んん、あっ、そのまま、あ、あっ、そこを……あんんっ、擦って……！」

真奈佳

「そこ、あああっ、気持ちいいっ、ふ、あっ、ビリビリする、う……んは、あっ、ふあああっ……！！！」

真奈佳

「そのまま、んあっ、さ、されたら、ふああっ、また、イクツ、んんうっ、いき、そ……！」

真奈佳

「なん、でっ……んあっ、先輩、ふ、はっ……私のか、感じるところ、お、ふあっ……わかるんですか？」

真奈佳

「ん、ああっ、わかってる、わけじゃない、ん、ですか？　それ、なのに……あ、あああ  
んっ！」

真奈佳

「気持ちいいっ、あはあっ、気持ち良くて、あ、んんっ、頭が、蕩けちゃう……！！！」

---

---

真奈佳

「おまんこも、濡れて、あ、んんうっ……これ、音……ふああっ、ぐちゅぐちゅって、んんんっ、この音……わ、私から、あ、出てる………!?!」

真奈佳

「あ、ああっ、こんな、い、いやらしい音……ふああっ、私の中、から、出てるなんて……あ、あんっ、恥ず、かしい……!」

真奈佳

「締め付け、てるのに、ああんっ、すく、ち、力強く、動いて……あああっ、たまらないっ!」

真奈佳

「せ、先輩は……? 先輩はどうですか? んんんっ、気持ち、いいですか?」

真奈佳

「そう、ですか……んっく、良かった……でも、ん、んん、ふっ……だんだん、な、慣れてきましたから、あ、ああっ、先輩の、う、動きたいように、ひ、あっ、動いていいですから………!」

真奈佳

「あ、あっ、もっと強く、し、したかったら、んはあっ、お、思いつきり、ひ、ああっ、やっていいですから……!」

真奈佳

「んくああっ!?! ま、また……!?! もっと、あ、んんんっ、おちんちん、が、大きくなった………!?!」

---

---

真奈佳

---

「うあ、あああつ、どんどん、ひ、拡げられる、感じが、あ……します……!？」

真奈佳

「大丈夫です！ もう全然、んんんっ、痛くなくて……それ、より……ああっ、気持ちいい、のが、ふ、ああっ、体中に、ひ、広がってくる……!？」

真奈佳

「くあああんっ!？ お、おっぱいまで……!？ あ、ふあっ、そんな、あ、んあっ、手のひらいっぱい、揉みながら、あ、ひゃああんっ、乳首っ、あ、ああっ、指で、グリグリされたらあ……!？」

真奈佳

「し、信じられない……! んはああっ、もつと、気持ち良く、なるなんて……あ、ああああっ……!」

真奈佳

「あ、あ、ああっ、あああっ、おっぱいも、おまんこも、気持ちいい……! どっちも、お、んはああっ、感じるううっ……!」

真奈佳

「セックスって、んあっ、こんなに、あ、気持ちいい、もの、だったんですね!」

真奈佳

「えっ？ 先輩も初めてだから……ああ、そうだったんですね……んんうっ、ふふっ、エッチな本を買うだけで、あんなに恥ずかしがってるくらいですから、あ、ああっ、それはそうですね」

---



---

真奈佳

「でも、じゃあ、あああつ、先輩も、んんうつ、童貞、だったのに……ふあつ、あ、ああつ、私が、それを、んんうつ、もらっちゃったんですね」

真奈佳

「ふあつ、あ、ああつ、なんだか……うれ、しい……ひああんっ……!」

真奈佳

「すごい、どんどん、んんんっ、激しく……んくうつ……先輩っ……もっと……あああつ、もっとと激しくしてええっ……!」

真奈佳

「ふあっ!？ んは、あつ、あああああああッ……!」

真奈佳

「ひ、響く、う、んはあつ、お腹の、奥に、ああんっ、ずんって、くるっ、う、ああつ、深いところ、に、あ、ああつ、当たってる、のが、ああつ、わかる……!」

真奈佳

「せ、先輩っ……ああつ、先輩っ……もう、このまま、あ、最後まで……! ひあああつ、私の中で、さ、最後、まで、んあつ、してっ……してくださいっ……!」

真奈佳

「は、はいっ、んあつ、はいっ、最後は、あ、ああつ、中でっ……んあつ、だ、大丈夫です、からっ……先輩が、い、嫌で、なければ……!」

---

---

真奈佳

「ふあ、ああっ……あ、あ、あっ、こ、こんなに、力強い、なんて……ふ、うう、あっ、先輩、すごく、んんっ、男らしい、です……！」

真奈佳

「そんな、顔……ああんっ、初めて、見るっ……ふあ、あああっ、おっぱいが、あ、んんんんうっ……！」

真奈佳

「大丈夫、う、もっと、んあっ、こね回す、ように、あ、あっ、気持ち良く、して、くださいっ！」

真奈佳

「私も、んんんっ、ち、力いっぱい、締め付けます、から……！」

真奈佳

「ん、んんうっ、こんな、感じで……いいですか？ ちゃんと、し、締め付けられていますか？」

真奈佳

「………よ、良かった。んあっ、じゃあ……んんっ、もっと、ぎゅってしますね」

真奈佳

「もっとぎゅってして、ん、くっ……先輩のおちんちん、んうっ、気持ち良くしちゃいますね」

真奈佳

「ん、んっ、だから先輩も、くふっ、え、遠慮なく、うはああっ、動いてください……！」

---

---

真奈佳

「はあ、ふ、ああっ、ズンズン、くるっ、う、ん  
んっ、お腹の奥に、あ、あっ、響いてくるの  
が、は、あっ、気持ちいいっ!」

真奈佳

「こんなの……あ、んんっ、こんなの初めてっ…  
…ひあ、あ、気持ち、良すぎて、あんんんっ、  
体が溶けちゃいそう……!」

真奈佳

「先輩っ、あ、あっ、もっと、あ、んんうっ、  
もっと激しく……私のおまんこ、ふ、あっ、  
もっと、力いっぱい、突いてください!」

真奈佳

「先輩のおちんちんで、あ、んんっ、私のっ、ん  
はっ、私のおまんこ、あ、ふあああっ、気持ち  
良く、してくださいっ!」

真奈佳

「あ、はあっ、ああっ、そこっ……おちんちん  
の、さ、先っぽが、あ、ふあああっ、当たって  
る、ん、んんんっ、うっ、一番、気持ちいいと  
ころに、ひ、当たってるっ……!」

真奈佳

「ずっと、ああっ、ずっとそこ、されたら、あ、  
ああっ、私、またイクッ、うううっ、またイッ  
ちゃう、ん、んんんっ、さっき、イ、イったの  
に、ひ、んんんっ!」

真奈佳

「ひはああっ、な、何これっ!?! おまんこのほ  
うに、あ、ああっ、何かくるっ、せ、先輩っ、  
私、あ、変な感じ……!」

---

---

真奈佳

「おまんこがっ、ああっ、気持ち良すぎて、あ、ひあっ、何かが、き、来てるんです!」

真奈佳

「あ、あ、あああっ、出るっ、う、はあっ、出ちゃう、あ、んあっ、おまんこ、出るっ、おまんこ出ちゃうっ!」

真奈佳

「ご、ごめんなさいっ、私、そこ、あ、ああっ、弱いところ、ずっと、されたら、あ、あっ、もうダメっ、イクツ、あ、ああんっ、さっきよりも、ふ、ふあああっ、イっちゃうっ!」

真奈佳

「が、我慢、できないっ、ああっ、これ、あ、ごめっ、せ、せんぱっ、あ、あああっ、ごめんなさ……、出るっ!」出ちゃうっ!」

真奈佳

「んはあああああああああああああ

——ッッ!」

真奈佳

「は、ああっ、な、何これえっ!? あ、あああっ、おしっこ、みたいな、あ、でも、ちが、あ、ふ、はあっ、あああっ!」

真奈佳

「ま、まだ出るっ、ん、はあっ、おまんこ、こ、擦られてる、から、あ、いやああっ、止まらないうっ!」

---

---

真奈佳

---

「先輩っ、み、見ないで！　んはああっ、見ちゃだ、あ、めえええっ、ああああっ、またイクウウツッ！！」

真奈佳

「ふああああああああああっ、き、気持ちいいよおおー」

真奈佳

「んはっ、ああっ、せんぱ、い、ごめ、ん、なさいっ、んはあっ、そ、そっちに、か、かかったちゃっ、た、あああっ……！！」

真奈佳

「くっはああっ！？　あああっ、も、もっと、んはあっ、激しく……！！？」

真奈佳

「ひ、ああっ、しお、ふき？　ああっ、ん、今の、ふ、ああっ、おしっこ、みたいなのが、ふ、ああっ、いっぱい出たのって、んんんあっ、潮吹きって、い、言うんですか？」

真奈佳

「んあっ、は、ああっ、おし、っこ、じゃ、ないんだ……！？　んは、あ、はああんっ……！！」

真奈佳

「んは、ああっ、先輩の、んはっ、どんどん、は、激しくなって、あ、あっ、おちんちん、んんっ、ビクビク、してる……！！」

真奈佳

「イ、イきそう、なんですか？　んは、ああっ、先輩も、あ、んんうっ、イきそう、に、なってるんですか？」

---

---

真奈佳

「ああ、ん、はっ、き、きてっ、先輩っ！ ん、あ、ああっ、この、まま、ふあっ、私の中に、きてっ！」

真奈佳

「一番、んんっ、深いところに、ふ、あっ、先輩の、んく、あっ、先輩の、熱いのを……私にくださいっ！」

真奈佳

「本当です！ 本当に、あ、んんんっ、出しているですから、あ、ひあっ、ここまできたら、あ、ああっ、最後まで、してくださいっ……！」

真奈佳

「ちゃんと、んは、あっ、出すまで、ふ、ああっ、先輩のこと離しませんから……！」

真奈佳

「あ、んんっ、こ、こういうの、嫌ですか？ あ、んんっ、全身、ぎゅって、されるの……ふ、あっ、嫌いですか？」

真奈佳

「んはっ、あ、嫌じゃない？ それ、なら、あ、ああっ、も、もっと……んんんっ、先輩のこ、と、ぎゅってしちゃいます」

真奈佳

「先輩っ、んんんっ、だい、すきっ、んあ、はああっ、大好き、ですっ、んはああっ、大好きっ、大好きいっ、だいしゅきいいいっ……！」

---

---

真奈佳

「ずっと、ふあんっ、大好き、でした、あ、だから、あ、あっ、だから先輩のっ、ん、ああっ、先輩の熱いのおっ、わ、私にっ……私の中にっ、注ぎ込んでええっ!!」

真奈佳

「あ、ああっ、ん、はっ、ふあああっ、それっ、は、激しいっ、のが、ああっ、いいっ、それ、ずっと、あ、あっ、私の中っ、突いてっ、んはっ、おまんこ突いてっ、ああっ、そのまま、突いて、出して、ん、あああっ、出してほしいっ!!」

真奈佳

「私に、ああんっ、先輩の、んああっ、先輩のを、くださいっ! いっぱい、あ、ああっ、私を、ふああんっ、大好きな、先輩のっ、あ、あ、ああっ、先輩のものに、してくださいさ  
いいいっ!!」

真奈佳

「あふ、あ、はあああっ、せん、ぱいっ、ふあん、はああっ、せんぱあいっ、あ、くっ、ひああんっ、あんっ、あ、ふ、はあっ、あああっ、く、はあっ、あ、あ、あああっ、ああああっ、あああああああっ……  
!!……」

真奈佳

「あああああああああああああああああああああああああ  
——ツツ——  
!!……!!」

---

---

真奈佳

「あふ、あ、はああああっ、熱いの、あ、き  
たっ……あ、んんっ、先輩の、熱いの、お、  
ふあっ、入って、きてるっ、あ、ああっ、すこ  
い、勢いが……！」

真奈佳

「お腹の、奥が、あ、んんっ、押し上げ、られ  
る、みたいな、あ、ふあっ、中に、だ、出され  
たら、ああっ、こんな、感じが……！」

真奈佳

「ふ、あっ……あ、あっ……んあ、う……あ  
あああ……」

真奈佳

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……  
……はあっ……ああ……イっ……ちやい  
ました、よね？ あはは……最後まで……し  
ちやったあ……はあああっ……」

真奈佳

「ちよっと、んんっ……見てみたい……  
わっ、隙間からこぼれてる」

真奈佳

「これが……先輩の、精液……なんですよね」

真奈佳

「本当に私の中に入っちゃったんだ……」

真奈佳

「あっ、大丈夫です。今日は本当に大丈夫な日で  
すから……」

真奈佳

「えっ？ それでもできちゃったら？ その時は  
……えと……」

---



---

真奈佳

「へっ！？　せ、責任取るって……な、何言って……こんな、じ、状態で……！　えっ？　あ……た、確かに、さっきもそんな話しましたけど、あれは……ど、どちらかと言えば、その……男女交際、的な、意味で……」

真奈佳

「あ……そ、そうですね。とりあえず……抜きましようか」

真奈佳

「んふっ……わ、あっ……ドロツて出てきた……」

真奈佳

「私も色々出しちゃったし、掃除しないと……」

真奈佳

「あいたたたっ！　ううっ、動くと痛い……」

真奈佳

「あ、だ、大丈夫です。ゆっくりなら……動けますから……」

真奈佳

「それよりも、交代の時間までにここを綺麗にしないと……えっと……掃除道具は………」

真奈佳

「えっ？　先輩がやってくれるんですか？　……ありがとうございます」

真奈佳

「それにしても……ふっっ、大変な事をしちゃいましたね。……仕事なのに……こんなバレたら二人ともクビですね」

---

---

真奈佳

「今度する時は、別の場所にしないと……」

真奈佳

「えっ？ 次、ですか？ 私は……次、も……あっていいと思ってます、けど……」

真奈佳

「先輩は……そのへん、どうなんですか？」

真奈佳

「……あってもいい……本当ですか？」

真奈佳

「あの……私……い、一応……告白、み、みたいなこと、しちゃったんですけど……先輩は……その……ど、どう、思ってるんですか？」

真奈佳

「こんな……その……オナニーばかりしているような女の子、ですけど……よ、良かったら……」

真奈佳

「えっ？ その先は言わなくていいって……あ、はい……先輩の……答えは……」

真奈佳

「せ、先輩……はい……これから……よろしく願います」

真奈佳

「先輩……大好き、です」

／＼おわり

---